36
世界文学全集

人間の絆〈2〉／月と六ペンス

モーム／中野好夫訳

世界文学全集　36

人間の絆　II／月と六ペンス

サマセット・モーム

訳者　中野好夫

発行／1971年6月30日　7刷／1977年8月15日

発行者／佐藤亮一　東京都新宿区矢来町71

発行所／株式会社・新潮社　東京都新宿区矢来町71

電話東京(03)266-5111　振替東京4-808　郵便番号162

印刷所／三晃印刷株式会社　製本所／新宿加藤製本所

本文用紙／三菱製紙株式会社

製函／文京紙器株式会社

函貼・扉・見返／特種製紙株式会社

表紙クロス／ダイニック工業株式会社

乱丁・落丁本はお取替えいたします　Printed in Japan 1971

目次

人間の絆（続）……3
月と六ペンス……319

Of Human Bondage

The Moon and Sixpence

by

W. Somerset Maugham

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

人間の絆（続）

冬学期のはじめに、フィリップは、外来つき助手になった。外来担当医師が、三人いて、毎週二日ずつ、それぞれが、診察にあたったが、フィリップは、ティレル博士のもとに、その所属を選んだ。ティレル博士は、学生間に非常な人気があり、その助手になるには、かなりの競争があった。博士は、年は三十五。やせた、背の高い男で、小さい頭に、赤い髪の毛を短く刈りこみ、大きい青い目が、目だっていた。顔は、あざやかなあから顔だった。気持ちのよい声で、よく談じ、ちょっとした冗談が好きだし、ごく気楽に世の中のことを考えていた。保健顧問のほうでも、さかんに活躍しており、いずれ将来には、勲爵士（ナイト）の名誉が待っている、医者としては、成功者だった。ふだん学生や貧しい連中と接しているところから、どこか上手（うわて）に出るようなくせがあり、また常に、病人ばかり相手にしているものだから、よく顧問医師が、その職業的態度として身につける、いわば健康人の陽気なおうようさがあった。彼の前に出た患者は、まるで愉快な教師の前にでも立たされた生徒のような気持ちがする。彼の悪い癖というのは、余計な、くだらないいたずら好きだったが、それも、むろん人を怒らせるというよりは、むしろおもしろがらせるだけだった。

学生は、毎日、外来患者診察室に出て、患者を見、それぞれできるだけの知識を、習得することになっていた。だが、一度助手の当番という日になると、仕事は、もっとはっきり決まってくる。そのころ、聖ロカ病院の外来部は、それぞれ中でつながっている三つの部屋と、大きな石の柱、長いベンチのある、大きな暗い待合室とから、成っていた。ここで、患者たちは、正午に、施療券を渡されて、待っていた。薬びんや薬つぼをもった長い行列、中にはきたない、ボロボロの服を着たものもいるが、また中には、相当の風体をしたものもあり、それらあらゆる年ごろの男女たちが、黙々として、暗い中に待っている。まさしくそれは、世にも陰惨なながめだった。てもなくドーミエ（訳注 フラン

スの画家。一八〇八ー七九年）のあの暗い画面を思い出させた。どのへやもみんな、壁は淡紅色に塗ってあり、腰板だけが、さらに濃い赤褐色(せきかっしょく)に色どられていた。消毒薬のにおいが、強く漂っており、ことに午後おそくなると、それが、ひどい体臭と混じりあった。最初のへやが、一ばん大きく、真ん中には、医師用のテーブルが一つと、イスが一脚、置いてあり、その両側には、もっと小さい、もっと低いテーブルが二台、置かれていた。その一つには、病院住込みの医師がすわり、もう一方には、その日の診療簿をもった助手がすわった。大きな帳面で、それには、患者の名まえ、年齢、性別、職業と、さらに病気の診断などが、書きこんであった。

一時半になると、住込み医師がはいって来て、ベルを鳴らし、案内人に、まず再来の患者から、呼び入れるようにいう。再来患者は、いつも相当にあった。二時に、ティレル博士が来るまでに、できるだけ彼らをみておく必要があった。フィリップが組になった住込み医師は、快活な小男だったが、これはまた自分の地位を過大視しており、助手たちに対しては、妙に先輩ぶった態度に出、またかつては一緒に在学した学友であり、そのために、自然彼がいまの地位に対して要求しているような、尊敬を払わない上級生たちのなれなれしさに対しては、目に見えて、けぎらいした。彼が、患者たちの診察にかかると、助手が、それを助けた。患者たちは、あとからあとから、はいってきた。男が、まず先だった。慢性気管支炎。「悪性のせきはなはだし」これが、たいていのものの病状だった。ひとりが、その住込み医師の前へ行くと、つぎのものが、助手に、施療券をさし出す。もし経過さえ順調なれば、それに、「連投十四日」と書きこむ。すると彼らは、薬びんなり、薬つぼなりをもって、薬局に行き、さらに十四日分の薬をもらっていくのだった。ところが病院ずれのした患者たちは、わざとグズグズして、直接医者の診療をしてもらおうとするのだが、たいていの場合は、成功しなかった。ただ三人か四人、特に医者の注意を必要とするような病状のものだけが、あとへ残されるのだった。

ティレル博士は、ソソクサと、いかにも楽しそうに、はいってくる。なにかちょっとサーカスの舞台へ、「またもや、ここにお目通り」とどなって、とび

出してくるあの道化役者の格好を思わせた。彼の態度は、まるで、病気なんて、なんてくだらないナンセンスだ、なに、いまにすぐ直してやる、とでもいわんばかりだった。席につくと、まず再来の患者で、みなければならぬのはないかときき、それらを手早く診療し、彼らの顔を、例の鋭い目でにらみながら、いろいろと症状を論じたり、住込み医師相手に、愉快な冗談を飛ばすのだった。そのたびに、助手たちは、腹をかかえて笑いだすし、住込み医師本人までが、助手が笑うなどと、生意気だというようなふうはしながらも、やはり釣りこまれて笑いだす。で、さてそれから、博士は、いいお天気だの、暑い日で、などと言いながら、またベルを鳴らして、案内人に、つぎの新患を呼び込ませるのだった。

彼らは、ひとりずつはいって来て、博士のすわっているテーブルのところへ行く。老人もいれば、若いのもいるし、中年ものもいる。たいていは、ドック労働者か、荷馬車引きか、工場労働者か、酒場の給仕か、とにかく労働者階級だったが、中には、ちゃんとしたふうをして、明らかにもっと上の階級、たとえば商店員、会社員というようなものもいた。こうした連中になると、急に博士の目が、うさんくさそうに光る。彼らは、ときには、ことさら貧乏人を装って、ひどい服を着てくることもあるが、博士の炯眼（けいがん）は、たちまちそうしたうそを見破るばかりか、ときには、十分普通の医者代が払えそうな連中には、はっきり診療を断わることさえあった。女が、一ばんたちが悪いが、そのくせやり方は、すこぶるまずかった。ほとんどぼろにちかいようながいとう、スカートを着て来ながら、かんじんの指輪をはずすのを忘れているからだった。

「そんな宝石など、持てるくらいならばね、あなたは、ちゃんと医者代が、払えるはずだねえ。ここはね、施療病院なんだよ。」

そして施療券を返すと、つぎの患者を呼んだ。

「でも、このとおり、施療券をもらってるんですが。」

「施療券、そんなものが、なんだね？　さ、帰りたまえ。ほんとに貧乏な人にとって必要な時間を、きみ、そんなにじゃまする権利はないんだ。」

患者は、ひどく怒ったような顔をして、プリプリと出てゆく。

「きっとあの女、新聞に投書するよ、ロンドンの施療病院のおそるべき不親切だなんてね。」

つぎの患者の施療券を受け取って、例によって、鋭く相手を見つめながら、博士は、笑っていうのだった。

たいていの患者が、施療病院とは、国家の施設で、そのためには、彼ら自身、ちゃんと、税金の中から払っている、というふうに思っていた。——したがって、受ける診療は、すべて当然の権利であり、彼らのために時間を費やしているその医者には、十分報酬はしてあるのだ、というふうに考えていた。

ティレル博士は、助手たちひとりひとりに、患者を割り当てる。と、彼らは、めいめい、患者を奥のへやへ連れてゆくのだが、それは、最初のへやよりは小さく、へやごとに、黒い粗毛布をかけたベッドが置いてある。まずいろいろと、患者に質問し、肺、心臓、肝臓などを調べてから、事実をカルテに書きこむと、ほぼ自分で診断の見当をつけておいてから、博士のはいってくるのを待つのだった。その博士は、男の患者の診察が終ると、五、六人の学生を連れて、はいってくる。そこで、助手が、その診察の結果を、読みあげると、彼は、それに一、二、質問を発してから、こんどは、自分で診察する。もしなにか興味のある点があると、学生たちも、聴診器をあてる。ひとりの患者に、胸には二、三人、背中にはふたり、しかもまだほかに、じれったそうに待っている学生がいるといった場合も、けっして珍しくない。学生たちのあいだに立たされて、患者は、ちょっとバツ悪そうな顔もしているが、同時に、そうまで注意の焦点になっているということは、案外まんざらでもない様子だった。博士が病状について、ペラペラしゃべりだすと、彼は、ドギマギしたように、聞き入っている。二、三の学生たちは、博士が説明する鼓動音を、あらためて確認するために、もう一度聴診器をあててみる。そしてはじめて、患者は、服を着てもよろしいと、いわれるのだ。

いろんな患者の診察が終ると、博士は、また元の大きなへやに帰って、すわる。近所に立っている学生を手当りしだいつかまえては、いまみた患者に、きみは、いったいどんな処方を出すかときく。学生は、二、三の薬の名をあげる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

「ふむ、なるほど。とにかく、そいつは新薬だ。だが、あんまりソソッかしいのは、よそうぜ、きみ。」

これには、いつも学生たちが、笑いだす。博士も博士で、自分のユーモアに、自分で楽しそうに、目を輝かせながら、学生のいったのとは違う、なにか薬を処方するのだった。かと思うと、ちょうどまったく同じ病人が、ふたりあって、もし学生が、現にそのひとりに、博士自身が出したそのままの処方を、そのとおりいうと、博士は、こんどは、わざわざ頭をひねって、また別の薬を考えだすのである。ときにはまた、薬局の連中が、くたびれてしまい、ついいいかげん有り合わせの薬、といってもむろん年来の経験で、薬効のほどはよくわかっている、いわば病院調剤の名薬なのだが、そればかりやりたがるのを知っていて、博士は、わざとむずかしい処方を出してやっては、おもしろがっていた。

「薬剤師にも、少し仕事をこさえてやらんとね。だってね、毎日クチン、重曹ばかり出していてみろ、薬剤師先生、なにもかも忘れちまうからね。」

そこで、学生たちが、ドッとくると、彼は、グルリと見回して、われとわが冗談に、いい気持ちになる。それからまた、ベルを鳴らして、案内人が首を出すと、

「さ、女の番、再来からだぞ。」

そして、イスに深くもたれて、住込み医師と雑談していると、案内人が、再来の女患者たちを、ゾロゾロと連れてくる。大きな前髪をたらして、青いくちびるをした貧血症の娘たち、足らぬがちのその粗食すら、消化できないという娘たち、ふとったの、やせたの、だが、いずれにしても再三の出産のために、年よりもふけこんで、いわゆる寒ぜきをコホンコホンとしている年とった女たち、そのほかまたなにやらかやら、とにかくどこか文句のある女たちが、ゾロゾロと、行列をつくってはいってくる。博士と住込み医師とは、手早く彼女たちをみてしまう。だいぶん時間もたって、小さなへやの空気は、だんだん悪くなってくる。博士は、時計を見る。

「きょうは、新患が多いのかね?」

「ほんのちょっとでしょう。」と、住込みが答える。

「じゃ、呼んでもらおうか。旧患のほうは、きみ、や

ってくれたまえね。」
新患がはいってくる。男たちの病気は、まず大部分が、酒が原因だったが、女たちのは、栄養不良だった。六時ごろまでには、いっさいが終る。終始立っているのと、空気が悪いのと、たえず注意力を緊張させているのとで、フィリップは、グッタリとなってしまい、同僚の助手たちと一緒に、医学校へ行って、お茶を飲んだ。
仕事は、たまらなくおもしろかった。そこには素材そのままの人間、いわば芸術家の加工を待っている素材そのままの人間が、あった。フィリップは、彼自身その芸術家であり、患者たちは、手の中にある粘土のようなものだと思うと、一種奇妙な喜悦(きえつ)に襲われた。たのしそうに、ピクリと肩をすくめながら、あのかつてのパリでの生活、ただ美しいものをつくり出したい一心に、色彩だの、色調だの、濃淡だのと、夢中になっていたあのころを、思い出した。ところが、いまやじかに人間と接してみると、彼はいままでかつて知らなかったような力の喜悦を感じた。彼らの顔を見たり、彼らの話すのを聞いたりすることは、それこそ無尽蔵の興味だった。彼らひとりひとりが、ちゃんとそれぞれの癖を見せて、現われて来るのだ。モジモジと、物慣れぬふぜいで、はいって来るのもあれば、チョコチョコと、小走りに現われるのもある。かと思えばまた、ノッソリと、ゆうゆう近づいてくるのがある。恥ずかしそうに、現われるのがある。多くの場合、一目見ただけで、商売を当てることができた。どうしたら、相手にわかるように、質問ができるか、どういう点で、たいていの人間が、うそをつくか、またそれでも、どんなふうのきき方さえすれば、ちゃんと泥を吐かせられるか、そんなことも、みな覚えた。同じことでも、人によって、受け取り方が、どんなに違うか、それもわかった。同じ重症だという診断でも、甲は、冗談なりに、笑って聞くかと思えば、乙は、口もきかないで、絶望する。フィリップは、ここの患者たちに対しては、ほかの人たちに対するように、そんなに気おくれを感じなかった。必ずしも同情というのではない。つまり同情とは、一種の優越感なのだが、それよりも彼は、彼らとならば、すっかりうちとけた気持ちになることができた。また一方では、患者たち

を、すっかり安心させることもできた。患者が割り当てられて、いっさいが任されると、彼は、まるでその患者から、一種独特の信頼感をもって、いっさいを手中にゆだねられたような気がした。
「たぶん、ぼくは、生まれつき、医者にできてるんだろう。」彼は、微笑を浮かべながら、思った。「とにかく、いわば唯一の適所に、うまくぶっつかったということは、ありがたい。」
毎日午後になると演じられる、この劇的な興味に気がついているのは、助手の中では、彼ひとりらしかった。ほかの連中にとっては、患者は、ただの患者であり、病気が複雑ならおもしろく、わかりきった病気なら、めんどうくさいだけだった。鼓動音を聞いたり、異常肝臓に驚いたり、肺の中の、思いがけない音について、いろいろ議論をするだけだった。ところが、フィリップにとっては、けっしてそれだけでは、なかった。ただ見ているだけでも、たとえば頭の形、手の形から、目つき、鼻の長さにいたるまで、興味があった。このへやでは、人間性そのものが、虚をつかれて、習俗という仮面が、しばしば容赦なくはぎとられ、いわば魂が、すっかりむき出しの姿で見せられるのだった。ときには、生まれながらのストイシズムというようなものを見せられて、心からの深い感動を受けることもある。一度フィリップは、山だしで、無教育な男を、ひとり受け持ったことがあるが、彼は、もう絶望だといわれても、実に泰然自若として、少なくとも他人の前では、上くちびる一つ動かさなかった。そのすばらしい本能的勇気には、フィリップも、舌を巻いたことがある。だが、それにしても、彼自身ひとりきりになって、じっと、おのれの魂と向かいあったとき、なおそんな勇気をもつことができるのだろうか？　それともやはり、絶望にくずれてしまったのではなかろうか？　ときには、悲劇もあった。あるとき、若い女が、妹だという十八の娘を診察に連れてきた。きゃしゃな顔だち、大きな青い目。秋の日ざしが、一瞬落ちると、金髪が、まるで黄金のように、輝いた。それに、びっくりするほど美しい膚だった。学生たちの目は、ニコニコしながら、思わず彼女の方へ集まった。このきたない診察室に、美しい娘の現われるなどは、よくよくだったからだ。姉という女が、一

家の歴史を話したが、両親も、兄も、姉も、みんな肺病で死んだということで、いまはただこの姉妹ふたりきりだったのだ。ところで、その妹が、このごろ、急に咳きはじめて、どんどん体重が減るという。ブラウスを脱ぐと、首の色は、まるで牛乳のようだった。ティレル博士は、いつもの手っ取り早い手つきで、静かに診察した。ある一個所を指で示して、二、三の助手たちにも、聴診器を当ててみるように、いった。それがすむと、服を着てもよろしい、といった。ちょっと離れて、姉は、立っていたが、妹に聞こえないように、小声で博士にきいた。声は、不安にふるえていた。

「ねえ、先生、大丈夫でしょうか?」

「いや、まず疑いなしってところだろうねえ。」

「この妹が、もう最後なんですのよ。あの子に死なれては、わたしは、もうほんとにひとりぼっちなんですけど。」

彼女は、泣きだした。博士は、じっと、その顔を見つめていたが、そういえば、この女にも、すでにそれらしい様子が現われている。いずれ長生きのできる女ではあるまい、と思った。妹は、振り返って見て、姉の泣いているのを見た。いっさいは、わかった。美しい顔から、血の気が、サッとひいたかと思うと、涙が、ほおを伝いはじめた。ふたりは、声もなく泣きながら、一、二分間ばかりも、立ちつくしていた。と、そのうちに姉のほうが、ケロリとしてながめている、おおぜいの人のことも忘れて、妹のそばへ寄ると、グッと両腕に抱きかかえて、まるで赤ん坊にでもするように、静かに前後にゆすぶりはじめた。

帰って行ってから、ひとりの学生がきいた。

「先生、あとどれほどもつもんでしょうか?」

博士は、ピクリと肩をすくめた。

「兄も、妹も、最初の症状が現われてから、三月以内に死んでるようだねえ。あの娘も、まず同じことだろう。金でもあれば、またなんとかしようもあろうがねえ。まさかあの連中に、サンモリッツ(訳注 スウィスの有名な療養地)へ行けとも、いえないじゃないか。なんとも処置なしってとこだねえ。」

あるときはまた、男ざかりの屈強な男が、どうも痛みが、とまらないで困るといって、来た。クラブの医

者にもかかったが、どうにもきかないように思うので、ということだったが、これも宣告は、死だった。しかも、おそろしいが、それは、医学そのものに、どうする力もないのだという点で、まだしもがまんのできる種類の死の宣告ではなく、ただ彼が、複雑きわまる文明という、この大きな機械の中の、ただ一つのちっぽけな歯車にすぎない、しかも、彼自身は自動機械のように、その条件を変えるなんの力もないという、そういった意味での死の宣告だったのだ。いいかえれば、完全な休養、ただそれだけがチャンスだったのだ。だが、博士は、不可能を要求することなどしなかった。

「なにか、もっとずっと楽な仕事に、変えてもらうんだねえ。」

「私の仕事には、楽な仕事なんて、ありませんよ。」

「うん、でも、このままでいくと、まず自殺みたいなもんだね。非常に悪いんだよ。」

「じゃ、死ぬとおっしゃるんですか?」

「そういうわけでもないがね。だが、とにかくきみには、重労働はいかん。」

「でも、私が働かなけりゃ、だれが、妻子を養ってくれます?」

博士は、ピクリと肩をすくめた。こうしたディレンマは、もういく百度経験したかしれない。だが、時間に迫られている。しかも、まだまだみなければならない患者がいるのだ。

「じゃ、とにかく薬をあげよう。一週間したら、また来て、容態を言ってくれるんだねえ。」

男は、どうせむだな処方の書いてある施療券をもらって、出て行った。医者は、なんとでもいうがよい。だが、べつにおれは、もう働けないほど、悪いとは思えないのだ。それに、いまの仕事は、収入がよくて、それをよすなど、思いもよらなかった。

「まあ、一年だな。」と、博士はいった。

ときには、喜劇もある。ときどき、突然コクネー式ユーモアが、降ってわいたり、またディケンズの小説にでも出るような老女が、それこそ奇妙きてれつなおしゃべりで、みんなを笑わせたりすることがある。あるとき、有名な寄席劇場のバレー団の踊り子というのが、来た。どうみても五十女だったが、自分では、二

十八だという。とほうもなく厚化粧をして、学生たちに対しても、大きな黒い目で、臆面もなく秋波を送った。それに、笑顔というのが、これまたおそろしく蠱惑的なのだ。いやもうたいへんな心臓で、ティレル博士に対しても、まるで酔っぱらったひいき客でもあしらうように、手放しのなれなれしさで、やってくる。(それをまた、博士は、ひどくおもしろがっているのだが。) 慢性気管支炎で、これでは、どうにも商売ができないというのだった。

「あたしも、なんでまあ、こんな病気、しょいこんだもんだろうねえ。わからないったら、ありゃしない。生まれて以来、一日だって、病気なんぞしなかったんだがねえ。ねえ、先生、一目見りゃ、わかるでしょう?」

　言いながら、女は、学生たちの方を向いて、目をクルクルッとむき、染めまつ毛を、サッとそびやかし、黄色い歯並みを、光らせた。ひどいロンドンなまりがあるくせに、なまじ上品らしく見せようという結果、まるで一語一語が、大笑いの種になった。

「つまり、俗称寒ぜきってやつだな。」と、博士が、もったいぶって答える。「中年の女は、まずたいていやられるんだよ。」

「とんでもないわよ、先生。そんなことは、奥様方におっしゃることとよ。まだ、あたし、中年ものなんて呼ばれたこと、断然ありませんよだ。」

　目を、皿のように、見開き、小首をかしげて、なんともいえない小ずるそうな顔をして、彼を見た。

「ところが、そこが、医者の損なところでね。どうもときどきしかたなしに、ご婦人方に対しても、失礼なことをいわなければならないんでねえ。」

　女は、処方をもらうと、もう一つ、最後のあくどい笑顔をした。

「ねえ、先生、一度あたしの踊り、見に来てくださらない? ねえ、来てちょうだいよ。」

「ああ、いくよ、いくよ。」

　彼は、ベルを鳴らして、つぎの患者を呼んだ。

「先生方みたいな人がいらして、保護してくださるから、あたし、ほんとにうれしいわ。」

　だが、全体としていえば、悲劇でもなかった、喜劇でもなかった。むしろなんともいいようのないものだ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong